

財団だより

多摩川

1992. 3 第53号



クロアゲハ (アゲハチョウ科)
開張100~120mm。全体に黒。食
草カラタチ、サンショウ。



わずかばかりだが流れの復活した玉川上水 (小平市中島町 平成4年1月撮)

■ 多摩川現風景 ■

(9)玉川上水の冬枯れ

今年の正月明けに冬枯れの玉川上水を歩こうということになった。羽村から西武鷹の台駅までを、歩いたり電車に乗ったりと、楽しいハイキングだった。田村酒造では酒倉と玉川上水から引き込んだ水路を見せてもらった。

野火止用水と分岐する西武玉川上水駅あたりから水量は少なくなり下水処理水が水量維持のため放流される。これは東京都の清流復活事業の一環として登場し、野火止用水や千川上水にまでも分水されるようになってきた。それにしても、水路敷約30mはクヌギやコナラ・シデ等の武蔵野の雑木林に被われているものの、沿川はすっかり住宅地となってしまった。

● 関連する財団の助成研究 (No.は報告書番号)

<学術研究>

①玉川上水系に関わる用水路網の環境調査〔16分水路の利用形態と断面特性の研究〕

渡部 一二 多摩美術大学建築科専任講師 環境計画
1980年 No.26

②玉川上水の再通水が水環境に及ぼす影響に関する研究

田瀬 則雄 筑波大学地球科学系講師 水環境学
1989年 No.118

③玉川上水の江戸市中における構造と機能に関する研究

神吉 和夫 神戸大学工学部助手 土木史

④安定同立体を利用した玉川上水における浸透量と脱窒量の評価

田瀬 則雄 筑波大学地球科学系講師 水環境学

<一般研究>

⑤玉川上水系の用水流域住民の意識調査および水辺レクリエーションに関する調査

小坂 克信 八王子市立第三小学校教諭

⑥玉川上水系の用水の地域に果たした役割に関する調査—砂川用水の水利用を中心に—

小坂 克信 八王子市立第三小学校教諭

⑦多摩川中流域の屋敷林の研究—特に玉川上水周辺の屋敷林の構成— 秋山 好則 都立武蔵丘高校教諭

多摩川散歩

●高幡橋から滝合橋(浅川・3.5km)

日野の自然を守る会 富士 堯

今回は山本さんに引き続いて、浅川を高幡橋からさかのぼってみる。

歩いてみたのは2月中旬の平日、うすら寒い日であった。

京王線高幡不動駅下車。高幡不動尊を横に見ながら5分ほど歩くと高幡橋に着く。高幡橋は渡らないで、その下を浅川の右岸(南側)ぞいにさかのぼることにする。

このあたりは、かつては七生村と呼ばれたところ。東京の穀倉と呼ばれた水田地帯であったが、年々少しずつ住宅が増えている。新しいアパートにはリバーサイドハイツなど横文字が目立つ。

川に目をやる。水量は、その名の通り、もともと多い川ではないが、この季節はなおさら水量は少い。それがさらに改修工事で、人工的に流路を変えられたりしている。

河川敷はオギ・ツルヨシ、そして帰化植物のオオブタクサが目立つ。今は枯れて白っぽくなっているが、夏は背の丈までのむせかえるような緑。

堤防の上は、3mほどの幅の道が、自転車用と歩行者用に半分ずつ色分けされている。犬をつれて歩く人と何人もすれちがう。セグロセキレイがチ、チ、チと鳴いて横切る。

対岸は所々で護岸工事中。新しいコンクリートが目にしみる。

やがて左手に、向川原団地市営住宅。堤防ぞいの堤内地に散歩道が整備されていて楽しい。桜並木の下に

ガクアジサイ・コクチナシ・カンツバキなどさまざまな低木が植え込まれている。

再び川の流に目をやる。冬鳥が羽を休めている。カルガモ・オナガガモ・ヒドリガモなど250羽ほど。それにコサギとクロトキが各1羽。クロトキは夜になると多摩動物園にもどる。

次の橋は一番橋、そのきわに七生中学校。ここは校内に湧水があって、そこからきれいな水が浅川に流れこんでいる。ここだけオランダガラシやセリやヒメウキクサの緑がすがすがしい。

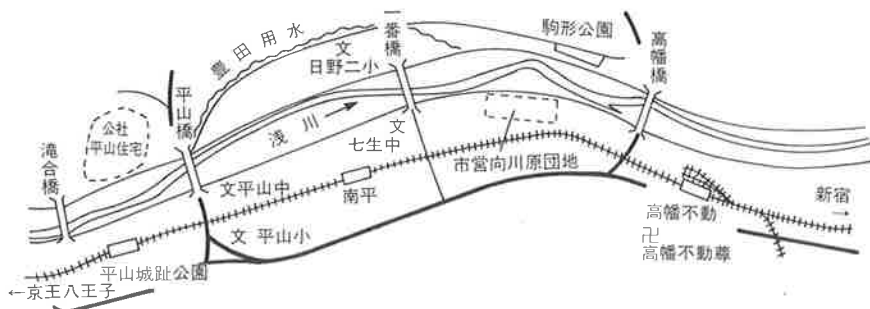
浅川の河川敷は昭和30~50年ころはオオブタクサやアレチウリに埋めつくされていた。どちらもアメリカ原産。輸入大豆に種子が混入してきたのだが、一番橋ぎわの今もある豆腐店が多摩川水系のアレチウリの分布の広がりに一役買っていたことは知る人は少い。

次は平山橋。右側の豊田側の水田は道路工事などであちこちで掘り返されているのはさびしい。

平山橋のきわの崖の下は、かつては大名淵と呼ばれる淵になっていて、ウグイ・オイカワ・ヤリタナゴなど多かったが、今はほとんど放流のコイだけ。水辺の石をひっくり返したら、シマイシビルとユスリカの幼虫が少々。これもさびしい。

ここまでくれば次の滝合橋までわずかの距離。左へ折れると京王線の平山城趾公園に出る。

<案内図>



私と多摩川



大菩薩峠を望む（1976年、曾根伸典撮）

むつ小川原開発常勤顧問 西川 喬

東京生れ東京育ちの私は、親父が東京市(当時)の水道局に勤めていたこともあって、子供の頃から多摩川とは結び付きが深かった。そのうちでも特に、山歩きの好きであった親父に連れられて、奥多摩の水源林の山々を歩き廻った。

大菩薩峠を越しての小菅川沿い、柳沢峠越、丹波川沿いの今でいうワンダフォーゲル等何回となくやっているが、特に憶い出に残っているのは、東京の最高峰雲取山(2017m)の登山である。確か中学2年(昭和12年)頃だったと思うが、親父とその水道の同僚の方々、それに兄貴と私6人位のパーティであった。熊谷から秩父鉄道を経て(もちろんその頃、西武鉄道は秩父に乗り入れてはいない。)三峰口へ至り、ロープウェイ(どうも当時は、ケーブルカーではなかったかなあという気がするが、もう一つははっきりしない。)で三峰神社へのぼり、その大講堂で沢山の講中の方々と共に、精進料理の一夜を、ほとんど雑魚寝に近い形で明かした。

翌朝三峰神社を出発、雲取山頂を目指しての登り一筋の歩み、ようやく山小屋に辿りついて2日目の夜を迎えた。3日目は先ず雲取山頂をきわめ、ここで荒川流域とわかれ、多摩川本流丹波川と支流日原川の流域界かつ東京府(当時)と山梨県の県境を七つ石に向けて縦走、七つ石から山梨県に別れをつけ、六つ石を経て氷川駅(現奥多摩駅)

へ到着したのは3時を過ぎていた。

七つ石と六つ石の中間位から山特有の俄雨が降り出し、又親父の同僚の一人が腹痛を起こし、この方を介抱しながらの下山に苦労したのも、少年時代のなつかしい憶い出となっているが、親父がしょっちゅう自慢していた、水道局が営々として育ててきた水源林を、山の稜線からずっと一望した時の素晴らしさは、言葉には言い表わせないのであった。この水源林は、恐らく現在でもそのままの姿で保存されており、東京都民の貴重な宝となっていることを信じて疑わない。

もう一つの山歩きは、趣味と勉強を兼ねて小河内のダムを見に行った時のこと、大学の土木の仲間と一緒に、私が道案内で、大菩薩嶺(2057m)に登り、後は溪谷沿いに下り一方、当日は小菅村泊、翌日ダムサイトに辿りついた。

すでに戦争による工事中止が決まっていた頃で、現場は静寂そのものであったが、付替道路はもうできており、上から見下す形のダムサイトは、基礎掘削も終わり、コンクリートを打てるままの姿となっていた。そして市がフーバーダムから購入した当時としては世界最大の25tケーブルクレーンが、じっと佇んでおった。記録によれば、昭和18年3月にコンクリート打設の準備はすべて終わっていたが、打設開始には至らず、同年10月工事中止が決まったとある。戦前最大しかも国の世話にならず、東京市が単独で着手した小河内ダムについては、書き出せばキリがないので筆を置く。

私は就職は満鉄、鉄道屋さんになる筈なのが、敗戦で行き場所がなくなり、海軍から運輸省建設本部それから建設省と、思いもよらぬ国家公務員しかも仕事は河川屋さんということになり、社会人として再び多摩川と縁ができ、治水・利水計画はもちろんのこと、河川敷開放計画から河川環境管理計画等々まで、いろいろ関係をさせて貰ったが、これらについては又改めて触れることとしたい。



国分寺崖縁の緑が映える調布堰の淵（平成4年2月撮）

多摩川紀行

山道省三

⑫ニヶ領用水宿河原堰下～調布堰（大田区田園調布）約9.2km

いよいよ最終コースである。

この多摩川カヌー下りを始めようと思ったのは、1989年5月に大潮と海風によって羽田から今回の調布堰下まで漕ったことがきっかけであった。従って小河内ダムの下からなどと大それた考えを起こし、行ってはみたもののカヌーは不可能と分って氷川まで歩いた1回目からすると丸3年がかりであった。

2月25日(水)。雪が降るかも知れないとの予想を裏切って暖かい日和で助かった。午前11時の川原の温度は15℃、水温8.5℃と水も温んでいる。

宿河原堰下の広い淵には両岸に30人程の釣り人がヘラブナやコイを釣っている。入漁料は1日400円とのことでほとんどの人が年間の会員だそうである。とてもこんな所から出艇なんかできないと、下流の方へと移動するも堰から1km程歩く始末であった。

無風、水も動かずどうなることかと思っただ、まずまずのすべり出しである。釣り人によるとこの下にはもう釣りのポイントはないとの事で、前回出艇直後に大ゲンカしたことを思えば、おだやかなツーリングであった。

中流部の中では最も下にあるこの区間でも、昨夏の洪水の跡はまだ各所に残っていて、低水護岸が削り取られている。復旧工事も進められているが追いついていない。工法もさまざままで新旧あわせて護岸の見本市の様相を呈している。

流れがなく、ポツポツとヨシ原やテトラポットの陰に佇

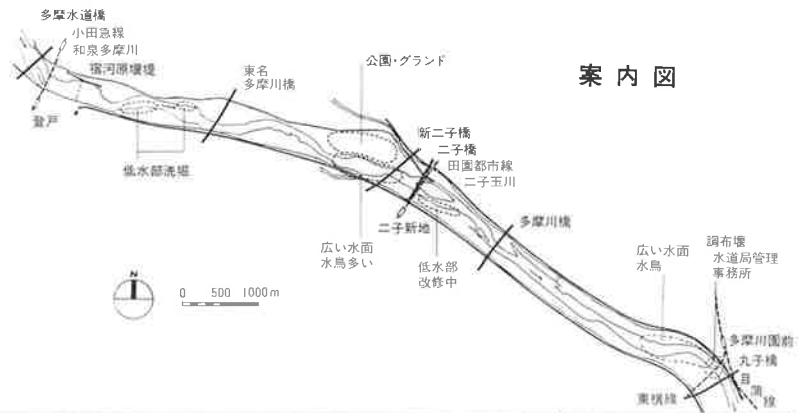
む釣り人に注意すると、水深が浅いのですぐ底につくの気をとられ気苦労が多い。東名多摩川橋のあたりでは瀬の中がかすかな下水臭が漂う。水の色はポマードの色を思い出す薄緑色をしている。パドルを深みに入れて透明度を見ると約1mぐらいで白い色が見えなくなった。

水鳥の数が極めて多いことに気づく。人の少ない湛水面や川原に、ユリカモメやカモの仲間、カラス、鶉、セキレイなど都市の鳥が無数に遊んでいる。中にはユリカモメに餌づけをしている人もいいる。幸い隠やかな人達ばかりで今回は声をかけてくれる人が多かった。とくに若い女子高生とおぼしき集団からの黄色い声には思わずポーズをつくる始末ではずかしくなる。「どこから来たのですか?」との質問に、まさかすぐそことも言えず、「奥多摩方面」と言ってしまった。但し3年かけて、が後に続くのではあるが。

二子橋から下は、水辺で釣りをしたり遊んでいる人はほとんどなく、のんびりと人の歩く速度の半分ぐらいで無事調布堰に辿りついた。約3時間の行程であった。調布取水堰の管理事務所の職員に許可を得て、魚道のすぐ上の船付き場で納艇した。

まる3年、計11回に分け小河内から河口までを歩いたりカヌーに乗ったりして下ってきた。冬枯れの様子、夏の振り、秋の静けさ、春の生きものの声。さまざまな多摩川の表情に出会えたことは幸せであったとしみじみ思う。このカヌー紀行の中で多くの人々からご意見をいただいた。単独行の無謀さ。他の人がマネをして事故でも起こしたらどうする等々。しかし、カヌーの危険性や川の恐さなども何回かお知らせしたつもりである。

多摩川には多くの人に知ってもらいたいさまざまな貌がある。そのわずかな情報をこのカヌー行でお伝えできればと考えてきた。どうか、多摩川の、川としてのやさしさや恐さも充分認識していただき、よりよいつき合いをしてもらいたいと思う。



財団からのお知らせ

〈第二次研究助成選考結果〉

去る10月23日第31回定時選考委員会を開催し、平成3年度（第2次）研究課題の選考を行いました。今回選考された研究はA類研究2件、B類研究2件です。研究課題は次のとおりです。

研 究 課 題	代表研究者	所 属
(A類研究)		
● 衛星による都市化の進展に伴う気候環境の変化に関する研究 — 多摩川中流部における都市について —	山 下 脩 二	東京学芸大学教育学部教授
● 多摩川における河川敷利用の変遷について	三 井 嘉都夫	法政大学文学部教授
(B類研究)		
● 多摩川における組合漁業の歴史的考察	宮 田 満	福生市教育委員会社会教育課
● 河川敷利用形態の違いが与える多摩川（下流域）の自然環境への影響	島 池 美 帆	慶応義塾大学理学部1年

寄贈文献の紹介

「玉川上水—親と子の歴史散歩—」

伊藤好一監修 肥留間博著 1991年10月
 財たましん地域文化財団発行 Tel 0425-74-1360

たましん地域文化財団（1991年設立）の多摩郷土文庫第一号として刊行されたこの本は、多摩地域の文化を、平易な文章でかつ格調高い内容でという主旨に沿い玉川上水の歴史を総括的にまとめたものである。300点にもものぼる写真や地図、さし絵が挿入され玉川上水のみならず江戸のまちの歴史を知るうえでも興味深い内容となっている。

「生きている野川」

若林高子
 写真 鏑山英次 文 若林房子 1991年11月
 財創林社発行 ㈱けやき出版販売
 Tel 0425-25-9909

「写真譜」とサブタイトルがついている。多摩川の支流野川を撮り続けてきた写真家鏑山さんが、野川の四季、生きもの、そして野川を愛して止まない人達の素顔を素晴らしい映像で紹介してくれている。

「自然と人間の事典」

半谷高久 岡部昭彦 秋山紀子編 1991年12月
 ㈱化学同人発行 Tel 075-592-6649

編集をはじめ多くの環境問題に精通した識者により執筆された人間と地球のための事典である。この本の特徴は、環境問題の克服という課題に焦点をあて人間と自然を勉強するひとつの枠組みを提示するとともに、自然科学、社会科学、人文科学の分野を広くとり入れてあることである。

「YATO—カタクリの咲く谷戸に— 横浜新治の自然誌」

横浜市緑区自然を守る会編 1991年9月
 ㈱文一総合出版 Tel 03-3235-7341

前掲の野川と同様、住民による谷戸の自然を記録した写真集である。市街化の進む横浜の郊外にあって横浜の原風景とそこに生きづく自然の移り変わりを写真とエッセイに調査記録を加えて紹介している。

第5回「多摩川実査」を終えて

昨年(2012年)の11月1日、財団主催による第5回「多摩川現地実査」が行われた。多摩川流域の状況をつぶさに見て、関係者の交流を行う趣旨である。

選考委員の先生方、研究者の方々、私ども財団関係者が参加して毎年、多摩川流域の現地を見学し、語り合う集いをこの5年間おこなってきた。今回は北浅川の河川敷にあるメタセコイヤの化石群、圏央道の計画のある高尾山、秋留台地開発、横沢入谷開発のある秋川市、五日市町等を訪ね、檜原村数馬に泊まるプランであった。

あいにくの雨で、昨年(2011年)の「東京湾を含むウォーターフロントと多摩川汽水域」の実査も雨に見舞われ、どうも誰か雨男でもいるのではと気がなったスタートであった。

渋谷にある財団の事務所ビルを総勢20人がマイクロバスで午前10時に出発、最初に八王子市の北浅川の河床にあるメタセコイヤの化石を観察した。「生きている化石」と言われているメタセコイヤの炭化したものが河床に露呈しており、現在は特に標示も無く、知る人ぞ知るとい状態である。保存についての評価がはっきりしておらず、行政を含めての今後の対応が注目される。

市街地にあり、比較的近づきやすい場所にあるので環境教育の場としても活用できよう。

北浅川から高尾山に向かう頃には、雨も小降りになってきて、空も明るくなり、ほっとする。

ケーブルで高尾山に登り、山頂から圏央道の計画地を望んだ。地元の方々が語る高尾山の自然を愛する気持ちを理解し、圏央道の建設が自然環境保全に充分の配慮をもって行われることを願った。

その後、秋川市役所を訪れ、秋留台地開発を含む秋川市の都市計画について説明を受けた。

東京都の最後の大規模開発と言われる「秋留台開発」が十分に議論をつくされることが必要であるとおもわれた。

瀬戸岡古墳を見学、古墳が土地の地主の方の好意により、保存されていることを知った。

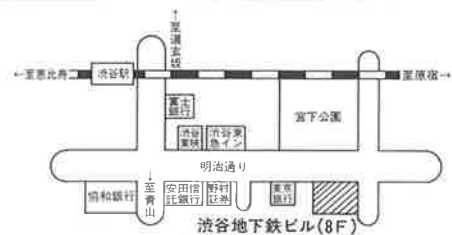
五日市町の横沢入谷を訪ね、市街地が迫り、開発が進行しつつある地域の実情と苦渋を知った。夕暮れの五日市町を後にし、バスは一路、秋川溪谷沿いに檜原街道を数馬に向かい三頭山の麓の山荘に到着した。

夜は選考委員の先生、研究者、地域の自然研究の方々が膝をまじえて「環境保全」と「開発」をテーマに熱心な議論が盛り上がった。かってギリシャにおけるシンポジウムもかくありなんとの充実した一夜であった。

「環境保全」と「開発」の問題は、双方の主張が充分にかわされて結論をだすべきものであり、今年ブラジルで行われる「地球サミット」においても、先進国である「北」の論理で環境保全を主張しても、途上国である「南」は目の前の国民の生存を主張して自然保護を切り捨てるケースも考えられる。環境問題はまことに“Think globally, Act locally!”であり、人がその立つ所で考え、意見を交換し、相互に理解しあうべきものであろう。これからも多摩川実査が、このような論議の場として活用されることがたいへん有意義なこととおもわれる。

常務理事 芳村重徳

- 発行日 平成4年3月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)3400-9142
FAX (03)3400-9141



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1 TEL (048)831-8125

※3月2日より当財団の事務局が渋谷地下鉄ビル13階から8階に移転します。